

患者への負担軽減手術「MIST」

治療向上へ知識共有

患者の負担が少ない手術・最小侵襲脊椎安定化術(MIST、ミスト)についての全国研究会「第9回日本MIST研究会」(会長・小谷善久製鉄記念室蘭病院副院長脊椎脊髄センター長)が今年3月、札幌市内のホテルで開かれた。道内外の専門医や手術に携わる医療スタッフら約250人が参加。MIST領域の診断と治療の向上を目指し、知識の共有と診断や治療に関わる連携の強化を図った。

(松岡秀宜)

全国研究会で道内外の250人

米国で開発されたMISTは、背骨の変形などを治すため、小さな傷口から患部となる背骨にアプローチする術式の総称。手術での切開が数センチ程度にとどまるため、出血の少なさや傷口の回復の早さに加え、リハビリテーションへの早期移行も可能となり、患者の負担を軽くできるという。

ただ、高度な技術と経験を必要とする術式であるため、若手医師などへの教育や技術の普及を目的に、2009年(平成21年)に日本MIST研究会が発足。14年には北海道MIST研究会(代表世話人・小谷同病院副院長脊椎脊髄センター長)も設立。術式の普及



MISTについての知識の共有と診断や治療に関わる連携の強化を図った「第9回日本MIST研究会」＝提供写真

などに力を注いでいる。今年3月の研究会は日本、北海道両研究会の共同開催。米国BACK Center(フロリダ州)の

リチャード・ハインズ教授が、日本では一部の専門病院でのみ行われている先進的な術式・前側方進入椎体固定術(OLIF)などについて講演。重度の脊柱変形に対する手術として豊富に取り組んでいる実状や手技などを紹介した。

このほか、「MISTの現在と未来」をテーマにしたシンポジウムでは、脊椎外傷、脊椎感染症、腰椎変性疾患、脊柱変形、骨粗しょう症など、各疾患に対する治療の現状について議論。「MISTとコンピュータ支援整形外科手術(CAOS)の融合」をテーマにしたシンポジウムでは、ここ数年の低侵襲脊椎手術では不可欠の技術となっているCAOSを用いて「いかにして安全・高精度、低侵襲に解決するか」などについて意見を交わした。

高齢化で背骨の変形などで悩む患者は増えており、身体への負担が少ないMISTを用いた治療も増加している。小谷代

表世話人は「国内の脊椎脊髄外科に関する手術の中で、MISTは35%ほどを占めるが、道内は遅れている現状」とし、研究会の開催や道内各地域での市民公開講座などを通じて、MISTをより一層普及させたいなどと話している。

基本手技なども学ぶ

「コメディカルコース」

第9回日本MIST研究会では、手術に携わる看護師や臨床工学士らを対象にした「コメディカルコース」の研修会も開かれ、参加者は基本手技や術前準備、ナビゲーション機器の操作などについて知識を共有した。MISTは、執刀する医師だけでなく、看護師



基本手技や術前準備、ナビゲーション機器の操作について理解を深めたコメディカルコース・研修会＝提供写真

(松岡秀宜)